# 「森銑三刈谷の会」だより　No. 2

例会日　第3土曜日 14：00～16：00（原則）
会場　刈谷市中央図書館 視聴覚室　参加自由

発行　2021年11月20日（月刊予定・投稿歓迎）
共同代表 神谷磨利子・鈴木　哲 tetsu_s@katch.ne.jp

**第2回「森銑三刈谷の会」（2021.10.16）14人参加**

**1.「村上文庫」時代についての随筆**（進行・神谷）

10月の会では先ず、銑三の随筆を参加者に読んでもらい、1916年（大正5）6月17日から始まった村上文庫の整理の仕事について確認しました。

刈谷藩の藩医・村上忠順の蔵書の中には古い医書も相当あったものを、宍戸俊治先生から富士川游博士の『日本医学史』（1904）を借用して調べたといいます。（「過去を語る」『森銑三著作集』12巻 pp. 387-388）

富士川游『日本医学史』（1904）の「永田徳本」肖像画。（国立国会図書館デジタルコレクションより）
村上文庫には徳本の本は『徳本翁遺方』や『梅花無尽蔵』等が所蔵されている。

この時の経験が後に『おらんだ正月―江戸時代の科学者達―』（1938）等に生かされ、「牛に乗って外へ出た仙人のような医者永田徳本」は同書の一番初めに紹介されています。（神谷）

**2. DVD「森銑三　知は市井に在り」**（進行・鈴木）

紀田順一郎[監]（1997 VHS /2009 DVD）「学問と情熱 第8巻 森銑三 知は市井に在り」紀伊國屋書店・ポルケ（42分:画面02:28）

後半は紀田順一郎[監]（1997/2009）「学問と情熱 第8巻　森銑三　知は市井に在り」紀伊國屋書店を視聴した。ナレーションは野際陽子である。森銑三（1990）『思い出すことども』中公文庫が引用され、刈谷市中央図書館が登場する。「近世学芸史研究の鬱然たる学問の森」の表現に心が震える。（哲）

**第4回　2021年12月18日（土）**
**村瀬典章さん「森銑三による村上文庫整理」など**

**「森銑三刈谷の会」への思い**　　飯田　芳子

私が音声訳の会に席をおいてから既に十余年がたちました。会では年4回、それぞれの担当者が利用者の皆様に向けて、新聞などから時流にあった記事を抜き出してお薦めの図書と共に紹介するという活動をしています。そうした中で図書として、「森銑三」の作品の音訳をしたいと考えました。きっかけは、反町茂雄の『一古書肆の思い出』1～5（平凡社、1998）を読んだことによります。

客観的に書かれたものにはある種の真実があると思うのです。まず、森銑三の人間性に惹かれました。自己を押し出すのではなく淡々と学問にはげむ人のように思えました。真摯です。何をおいても刈谷の偉人です。紹介できたらこんなうれしい事はありません。理由はそれで充分ではないでしょうか。先人の偉業がのちの世の人の心を惹きつけ予想外の仕事を思い付くことだってあります。実際に私は、森銑三の作品に触れながら面白いと感じているところです。私自身は、森銑三の仕事を学ぶことで、何かを吸収出来れば、それは人生における一つの大きな収穫ではなかろうかと思ったのです。音訳として図書を読むという行為は、聞くものが受け取りやすいように著者の著す文言を坦々と辿るという仕事です。それだけに読み手としては作品を深くしることが出来れば、より良い朗読としての結果が得られると思っています。そうした思いをこの会は養ってくれそうに思えるのです。